「マケドニアへの幻」使徒言行録１６章６～１０節

細井　茂徳

１６章に入り、パウロの第二回伝道旅行について学んでいます。パウロは今回の旅行で同伴者にシラスを選び、イコニオンではテモテが仲間に加わりました。当初、そこから西へ直進し、おそらくエフェソを中心とするエーゲ海沿いの地方に行く予定でいたのだと思われます。ところが「**聖霊から禁じられ**」、途中から急に進路を北に向け、フルギア・ガラテヤ地方を通ってミシア地方の近くまで行き、そのあと黒海に面したビティニア地方に行くつもりでしたが、そこでもまた「**イエスの霊がそれを許さなかった**」ので道程を変更し、ついにトロアスに至った。そのように彼らの計画が大幅に変わったことが記されています。

思いどおりに進めなかった、計画通りに行かなかったということは、パウロらにとっても嬉しくないことであり、焦りとなり、悩まずにはおれなかったことであったでしょう。けれども、これら一連の出来事を、聖霊による禁止と言うことができたのは、トロアスの町でパウロがマケドニア人の幻を見たからでした。パウロはこの幻に、神が自分たちをどこに導こうとしておられるのかとの御心を「**確信した**」のでした。

伝道の働きの最中、まるで足止めを食らい、回り道をさせられ、立ち往生してしまうような出来事にパウロたちは遭遇しました。しかしその背後に、確かに神の御心があったことが示されたのでした。実際、これによって、福音はパウロたちによってヨーロッパ世界にもたらされることになりました。後にこれら一連の出来事を振り返るとき、パウロは神の摂理を受けとめずにおれなかったのではないかと思います。

同じように、私たちも、これは御心にかなっていると信じ考えて始めたことでも挫折することがあります。その時は、不運不幸と思われ、とても主の導きや守りがあるとは信じられないと思うことがあります。しかしその思いがけない進路変更が、後に、当初予想すらしなかった新しい展開をもたらすことになることがあるのです。初めの計画や願いにまさる道が備えられていることがあるのです。神は恵みをもってご計画を進め、人の思いを越えた仕方で私たちを用いて万事をその聖なる目的へと導いておられます。神を信頼して進んでまいりましょう。